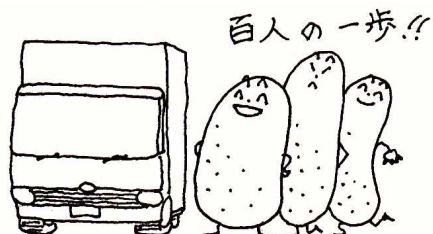


「百人の一步①～大分県日田市小野地区～」

校長 江口 満



が予想しただろうか。

校長通信「ジャガイモ」の筆が完全に止まった。三学期になってから新たに二つの号をお届けしたが、二学期末に準備していたから何とか発行できた。前回配布した号は、三学期始業式で生徒の皆さんに話す内容だった。しかし、生徒の皆さんが災害や事故から自分の命を守ることを考える機会になってほしいと思い、始業式の式辞を東日本大震災で語ら

新しい年がスタートした。令和6年三学期の始業式の冒頭、私は、「元日から能登半島地震、羽田空港の事故、小倉魚町銀天街の火災などが続き、生徒の皆さんや保護者やご家族の皆様も心を痛められたことと思います。お亡くなりなられた方に心からお悔やみ申し上げます。また被災された方にお見舞い申し上げるとともに、被災地の皆さまの生活が一日でも早く復興されることを心から願っております。」と挨拶した。このような年明けになると誰



10月7日(土)7時、被災地視察に出発する生徒会執行部とPTA役員の皆さん



急ピッチで行われる河川敷復旧工事



れた「釜石の奇跡」に急遽変更した。

だが、「ジャガイモ」の次の号は続かなかった。筆を執ることから決して逃げているわけではない。「何が何でもこの号を書き始めなくてはならない。」という思いが体の底から湧き上がってくるのだが、手が動かないのである。元日の16時過ぎ、テレビから流れる能登半島地震の映像から、自分の中の何かが止まったままなのだ。

元日のテレビアナウンサーの避難を呼びかける声が忘れられない。「今すぐ逃げること。」「テレビを見ていないで急いで逃げてください。」「東日本大震災を思い出してください。」緊張した様子で、何度も、何度も被災地へ警鐘を鳴らした。あの呼びかけで多くの方々の命が救われる。多くの方が助かるはずだ。そう祈った。テレビのアナウンスを聞き、実際に地域の方々と協力して高台に逃げて助かった方々も多くいたと聞く。その後、日々流れてくる被災情報の大きさに、私は言葉を失った。

私は、東日本大震災のことを、今でも鮮明に思い出す。【次号に続く】

【左】大分県日田市小野地区に通じる県道沿いには、7月の大雨による爪痕が数多く残されていた。

【右】大分県日田市小野地区に到着した「小野分館」の焼陶芸館



挨拶をする生徒会執行部



避難所支援や家電支援を行っているNP0法人リエラ代表理事Mさんから災害当時や復旧の様子を伺う。

「7月10日(月)の朝6時30分のサイレンで飛び起きたものの、既に遅い状態であった。朝一のため避難が遅れたのだ。小野地区では10世帯ほどが孤立し、ヘリの救助を受けた。ここでは2週間ほど泥を出す作業が行われた。建物の被害は少なかったが、もう一度大雨が降ったら土砂崩れが起きる恐れがあるため、仮設住宅に入居する住民もいる。毎年の水害で住み続けられるか不安を感じ、移住を決断する人もいる。復興に向け一番辛いことは、水害によりいつまた土砂崩れなどが起こるかもしれないという不安を持ち続けなければならないことだ。」

「今のうちから」 3年4組 生徒会長 Uさん

それはバスでの移動中の景色だった。たくさんの木が倒れ、根が地表に出ており、いたるところが崩れてどこから手を付けたらよいのかも分からない状態だった。バスが小鹿田焼陶芸館に到着した。そこで現地の方たちに話を伺った。その話の中で、豪雨による土砂崩れでの被害についての説明があった。橋が崩れ孤立した住民をヘリコプターを呼んで助ける必要があったそうだ。特に印象に残ったのが「急な豪雨によって家が壊され、逃げることもできない状況だった。」住民の



皆さんの声だ。私はその話を聞いて、より災害の恐ろしさが分かった気がした。
中学生のうちからこういった被災地へ赴くことで、実際に自分の場所で何かあったとき、冷静に対処できると思う。

【右上】バザーの利益を義援金としてNPO法人リエラMさんに手渡す生徒会とバザーで販売する特産品を購入するPTA【右下】Mさんの話を真剣に聞き質問する生徒会の皆さん



「恐ろしい災害の跡」 3年1組 生徒会副会長 Sさん

10月7日の土曜日、僕たち生徒会執行部は「第5回きずなプロジェクト」として被災地を訪れた。私は訪問した中で、大分県日田市小野地区でのことを述べたい。

まず初めに小野地区の「小鹿田焼陶芸館」を訪れた。そこではろくろを足で回したり、川の水の力を利用して土を砕いたりするなど、独自の技法を知ることができた。そんな小野地区は、今年の7月10日、「数十年に一度」と言われる豪雨に見舞われた。実際の被災地では巨大な木が一か所でぐちゃぐちゃになっていたり、道路が壊れていたりしていた。倒木は切断されたのではなく強引に力でむしり取られており、自然の圧倒的な力を感じさせられた。皆さんも一度、このような場所を訪れてみてほしい。皆さんにとっても人生に大きな影響をもたらす体験にきっとなるはずだ。



用松さんから小鹿田焼の里を案内していただく

「知り考え伝え想う」 3年3組 学習委員長 Tさん

私は二年生のときもこのプロジェクトに参加したので、二度目となった。大分県日田市小野地区。三か月前の7月10日の豪雨で被災した地域だ。当時の様子をうかがうと「早朝だったので避難が間に合わなかった。できなかった。」とのこと。ここで私が一番に思ったのが私たちは知るだけでなく、考え、より被災者の気持ちに近づこうとすることが大切なんだということだ。またこの被災者の言葉を聞いて、則松中のみんなは何を思うのだろう。みんなに考えてみてほしい。早朝、サイレンが鳴り、避難しようとするもできない外の景色を。私たちは災害で実際に避難したことがないからこそ考え、想いを伝えていくべきだと、今回足を運んで感じた。



登り窯では約55時間夜通して焚き続ける

日田市は毎年市内のどこかで被災しているとい

うことを知ったが、私はとてもよい所だと感じた。優しい地域の方々、きれいな空気、村中を響くからうすの音。本当に素敵なおとところだった。

小鹿田焼の里を出発する時、Mさんが最後に語ってくれた言葉が心に残る。「小鹿田焼はガスや電気を一切使わず、自然の力だけを使う。今回の水害のように水は怖いものであるが、水がなければ生きてはいけない。自然の恵みと、自然の恐怖を感じながら共生していく姿がここにはあります。」



【上】乾燥を終えた原土は、水力を利用した唐臼で粉碎。20～30日ぐらいかけて粒子状にする。



成形が終わった器をサライタに乗せ天日乾燥する